

Jean-Paul Goude

ジャン=ポール・グード
“生きるとは創造すること”

文章: P. モーリエ(P. Mauries)

ジャン=ポール・グード(Jean-Paul Goude)は、現在に至るまで 40 年余りにわたり、グラフィック・アーティスト、デザイナー、写真家、映像監督として、絵画、ポスターデザイン、写真、映画、ビデオ、イベントなど、多岐にわたるデザイン活動を通じて、私たちのイメージングに刺激的な影響をおよぼしてきた人物です。

1970 年代、伝説的な『エスクワイア』誌(Esquire Magazine)のアート・ディ

レクターに就任。ニューヨークではグレース・ジョーンズ(Grace Jones)をモデルにした作品を発表しました。1989 年に活躍の場をフランスへ。パリで行われたフランス革命 200 周年記念パレード、圧巻の『アラブ・スタイル』(style beur)を手掛けました。祝祭の演出、コダック(Kodak)やシャネル(Chanel)などの企業の広告ポスターの製作、そして、レティシア・カスタ(Laetitia Casta)をはじめとした時代を代表するスーパーモデルとのコラボレーションまで多岐にわたりました。こうしたグードが手がけた作品やイベントは常に、その時代の風潮や精神を見事に捉えたものとなっています。

2009 年には、10 年間にわたりグードがフォトグラファーを務めたフランスの百貨店「ギャラリー・ラファイエット(Galleries Lafayette)」のイメージビジュアルを編集した『Chronique d'une image』が刊行されました。さらに、2011 年には、40 年余りにわたるグードの活動の足跡を辿った回顧展の内容をまとめた『Goudemalion』が英仏 2 カ国語で出版されています。

また、近年は展示会の開催も相次いでいます。2011 年にフランス・パリの装飾芸術美術館(Musee des Arts Decoratifs)で行われたジャン=ポール・グードの回顧展「Goudemalion」は大成功を収めました。2014 年には、ニースの写真・映像博物館(Theatre de la Photo et de l'Image)でも展示会が催されました。また、同年、東京・六本木にあるデザイン・ミュージアム(21_21 DESIGN SIGHT)では、マルチに活躍するグードにインスパイアされた「イメージ・メーカー」と題した企



画展も開催されています。同企画展では、グードの作品が、同じくイメージ・メーカーのスピリットを持つデヴィッド・リンチ(David Lynch)、ロバート・ウィルソン(Robert Wilson)そして舘鼻則孝の作品とともに紹介されました。

受けるに値する賛辞に安住し、現在の栄光にしばし満足する人もいるかもしれませんが、ジャン=ポール・グードはちがいます。グードにとって生きるとは創造することに等しく、自らの中に宿るアイデアを肉付けし具体化していくことを止めることはできません。シャネル(Chanel)、ケンゾー(Kenzo)、ゲラン(Guerlain)、ヴィオネ(Vionnet)あるいは資生堂などの企業の広告を担当する一方、『ハーパーズバザー』誌(Harper's Bazaar)、『ヴァニティフェア』誌(Vanity Fair)、『ロフィシャル』誌(l'Officiel)、『V マガジン』誌(V Magazine)や『ペーパーマガジン』誌(Paper Magazine)などの雑誌にも定期的に寄稿しています。

さらに、ファッション業界であれば、ニコラ・ジェスキエール(Nicolas Ghesquieres)、リカルド・ティッシ(Ricardo Tisci)、ジャン=ポール・ゴルチエ(Jean-Paul Gaultier)、カール・ラガーフェルド(Karl Lagerfeld)、アズディン・アライヤ(Azzedine Alaia)、クリスチャン・ラクロワ(Christian Lacroix)...、エンターテインメント業界であればマライア・キャリー(Mariah Carey)、ケイティ・ペリー(Katie Perry)、オプラ・ウィンフリー(Oprah Winfrey)、ファレル・ウィリアムス(Pharrell Williams)、スカーレット・ヨハンソン(Scarlett Johansson)、ペドロ・アルモドバル(Pedro Almodovar)、キム・カーダシアン(Kim Kardashian)といった各界で活躍する「アイコン」について、ジャン=ポール・グードが独自のイマジネーションにより創造したメタモルフォーゼの数々は、今も私たちの記憶に印象深く残っています。その中でも、キム・カーダシアンの写真は、公開されるや否やウェブ上で大きな反響を呼びました。

いまや、イメージ技術やデジタル技術の進歩により、ワンクリックするだけで自分の望むトランスフォーメーションやマニピュレーションが可能な時代であり、実際のところ、ジャン=ポール・グードも作業に際してそうした技術を駆使しています。しかしながら興味深いことに、たとえそんな時代であってもグードは決してペンや鉛筆を手放すことはありません。今でも引き続き、ペンや鉛筆を使って、プロジェクトのひとつひとつをできる限り詳細に描いています。グードの作品に見られるこのような頑なまでにグラフィックな特徴は、メディア関係者の目をひきつけます。グードは、フランスを代表する日刊紙ル・モンドが発行する週刊誌『M,ル・マガジン・デュ・モンド』(M, le magazine du Monde)より 2014 年の 3 カ月間にわたって、また『ヴォーグ』誌(Vogue)からは同年のクリスマス特集号について、編集をはじめとする「全権」を委任されました。エヴルー・ホテル(Hotel d'Evreux)の中庭で開催されたスキアパレリ(Schiaparelli)のオートクチュール・ショーのために 2015 年 1 月に創作したヒプノティックなセノグラフィー(舞台美術)もグードの近年の代表作のひとつです。

ジャン=ポール・グードの疲れを知らない創作活動に対する思いや、その創作がもたらした多大な成果について理解する上で最後に指摘しておかなければならない点があるとすれば、それは

本質的に委託されて行う作品の創作活動が、グード自身にとっては徹底的に個人的なアドベンチャーのようなものであるということです。その過程における女性との出会いや、その出会いの高揚感が道しるべとなり、ある種の個人的な神話へと発展していくのです。グードは、人生と仕事を切り離すことができません。この点は偶然にも、グードの全作品に非常に独特な印象をもたらすとともに、彼の作品を単なるイメージ以上のものへと昇華させているのです。